





ここには
ハロゲン化銀（ハロゲン）感光
剤を塗っています。
消火剤を放出する際に感光剤の
脱落を行います。脱落の確率に
従い、車外へ避難して下さい。









私は、絵全体を「環境」と考え、その中で起きる「適応と反発」をテーマにしている。水族館の水槽のような区切られた空間の中に、モチーフとなる生き物たちを住まわせていく感覚だ。

このテーマを考える上で、「線」は最も重視してきた構成要素だ。

図と地を分ける線や、「環境」を分ける線、表現そのものを繋げ、分ける線。それらの線が描かれたキャンパスを、切り分けたり増やしたりすることでできる、物理的な境界線。そして、絵の中と、私たちのいる外界との境界線。

絵の中の生き物たちは、現実世界と同じように、与えられた環境下で周りの生き物との生活に適応することを目指す。一方、個性を獲得しようとする過程で、環境や他の存在に対し、ぐっと押し出すような反発の形を取ることもある。

そんな様子を見ながら、絵の世界にとっての創造主である私は、環境をさらに線で区切って身体を縮こませたり、パネルを増やし環境を広げてのびのびと育ててあげたりする。逆に、生き物たちの動きによって、環境を区切る境界線が動かされたり、環境そのものの形が浮彫りになったりもする。

さて、今回展示の場となった茨木市福祉文化会館には、建物を利用していた人々の痕跡が色濃く刻まれている。会館の現役時代を知らない私は、「どんな人たちが生活し、お互いに影響を及ぼし合って、この形になったんだろう...」「どんな創造主が、どんな理由で建物を作り変えていったんだろう...」と想像を膨らませた。

仕切られたり増設されたりを繰り返し、今では用途がよくわからなくなったように見える部屋に、さらに新しい概念を住まわせて意味を生み出すような意識で、作品を選んだり壁画を描いたりしてみた。建物を「環境」と考えての展示作業は、私が小さな絵の中の世界で行っていることを拡張したような、刺激的な体験だった。日々作品や建物と向き合う中で、今までは気づかなかった細部も見えてきた。

そして、もうすぐこの建物が取り壊しになるという「環境の変化」に対し、強い反発の気持ちが芽生えている。

井澤茉莉絵



